

1班 『日本近世・近代生活絵引』の編纂班代表者 田島先生に聞く

絵引作業の舞台裏

Some Additions to My Report in the Last Issue

田島 佳也 (神奈川大学日本常民文化研究所 教授 / 事業推進担当者)
TAJIMA Yoshiya



ニューズレターの前号、16号の特集では全ページの三分の二ほどを割いて『日本近世生活絵引』の作成作業について紹介しました。そのことについての若干の補足、手の内、ため息など、特集の責任者の田島先生に語ってもらいました。

前号であたらしい『絵引』作成について書いていた
だきましたが、いわばその舞台裏、あるいは作業の
手の内について少し…。

田島 私の専攻は日本経済史ですが、経済史的観点から
「農業図絵」を意識してみたことはあまりないですね。例
えば犁や鍬とかが描かれています。恥ずかしいですが、
全くと言ってよいくらい農業経済については無知で。

例えば、「江指浜鯨漁之図」はニシン漁業図が中心で、
ニシン漁業についてはこれまで研究してきているので。
近世の漁具や運搬船は、こういう形をしていたのかなど、
今まで文献に書いてあったことが具体的に絵に描かれて
いて、あっ、鯨網はこういうふうに浜に引き上げている
のか、近代とはちょっと違うのかなど、そういうところ
は何となく解るわけです。ところが、北陸の農村をフィー
ルドとして自分で調査・研究しているわけではなく、
「農業図絵」の場合は、描かれている北陸のこと、そこで
の農業のことが全く解らない。そうすると、単純に絵を
切り取り、番号をつける。これは何か、名称は、とか、そ
ういう単純作業をしているという意識の方が強いですね。

「江指浜鯨漁之図」の場合は、むしろ自分の研究フィー
ルドにしている所でもあるので関心が高い。江差の地形
からみたら、神社や商店などが何でこっちに向いている
のかな？とかね。江差には学生時代から何回も通い、海
岸に産業道路が造られて海辺の景観が完全に変わる前か
ら、江差浜辺りの景観、街並みなどを知っていますから。
そうだと、この辺りは妙にデフォルメされているな、こ
のようなところに神社が描かれているが、ちょっと変だ

な、とか疑問を感じるのだが、全くそういう認識が無い
と、疑問にも思わず、もう単純に『絵引』の作業をして
しまうところがあります。

絵の中のリアリティと現実の中のリアリティとは必ず
しも対応しないと思いますが。

田島 それはそうですが、やはり『絵引』を作る場合は
自分の持っている現実のイメージを投影させてしまいが
ちになりますよ。そしてそれから考え、文献などを調べ
て、これはこういうことなのかな、と。文献の説明と違
っているから、近世では形も使い方も異なっていたのか
なとか、そうしたことを思いめぐらしながら、ある程度
のことは解る。けれどもそれを専門的に研究しているの
か、していないのか、というのが重要な要素として『絵
引』の研究と作成にはあると思うんですよ。

絵を切り取って名称をつける時に、これは何なのだ、
とか。名称をつける場合には、1班ではなるべくその時代
の言われ方をできるだけ復元しようと決めました、難し
いんですが。地域の個性も大事にしたい。正確に名称を
つけるのが大切であるということは解るはずですが。澁澤
先生が作成した『絵巻物による日本常民生活絵引』でも、
確かに全部が専門家ばかりではありませんが、民俗学と
か農業社会学、経済史、それに模写をする絵師など、そ
れなりの研究をしている人たちが集まって、意見をぶつ
けあいながら進めた。現在のCOEの『絵引』班では、メ
ンバーの皆が集まって作業をし、議論をしたことがあり
ませんから。

ただ、澁澤先生たちの『絵引』作成では、何人かが研究所の部屋に集まって、議論をしながら切り取った絵の個々の箇所に番号を付け、名称を付けていったといわれています。毎日、研究会や作業を行っているわけではなく、集まったときにそれぞれのメンバーが自分たちの調べてきた事実をお互い突き合わせて検討している。そういう意味では、ほとんどそういうことを1班のなかでは行っていませんからね。ただ、1班のなかの福田アジオ先生の班、『東海道名所図会』から『絵引』を作る班では中村ひろ子先生と富澤達三さんを協力者に頼んで、集中的に研究している。ただ、『東海道名所図会』は大体、対象や地域が違っていても同じパターンの絵が多いですね。その意味では『農業図絵』などとはかなり異なるのではないかと、思いますよ。それに、『東海道名所図会』の場合は、図会の上はかなり詳細な説明文がついていて、理解の、また説明文を付けるときの助けになっていますよね。

『名所図会』自体が、ある類型的発想というか、類型的発想が現れる時代性を反映しているということですね。

田島 『名所図会』とはこういうものであるという型で出版されていますから。だから、各地の『名所図会』が出版されても、パターンが同じになるのは当たり前です。

そのなかで、リアリティをどんな風に洗い出すのか、ということですね。そうすると、中世のものよりも、ある意味で、複雑になりますよね。

田島 なるけれど、それがどれほどのリアリティを表現しているのかということになると、ちょっと僕には手に負えない。『江戸名所図会』を見ていくと、女性が歩いていても、その女性が「浮世絵」に出てくる女性のように描かれているところがたくさんあります。本当に、庶民の女性がこのような格好をして歩いていたのか。『農業図絵』などを見ると、金沢城下などの女性や庶民の姿を描いた絵は、『江戸名所図会』のそれとはかなり違います。着る物やほかの物には『江戸名所図会』よりも、リアリティがある。各地の『名所図会』に描かれている人物、とりわけ女性は「浮世絵」にみられるような描き方で描かれている。『名所図会』自体は、人々に地域を知らしめる観光宣伝手段みたいなものですから。

私だって漁労をしたことがないので、「江指浜鯨漁之図」を見て、果たしてそれが本当かどうか、軽々しく言えな

いわけですよ。そういう意味では1班メンバーは素人集団に等しいのだけれども、ただ文献などで多少の知識を持っている者と、全く持っていない者、現地に行った地理感のある者と無い者、そういった人たちが一堂に会して議論しあうことが大切で、図絵の分析には必要なことです。だからこそ、いろいろな専門分野の人たちに加わってもらい、多くの知恵を絞り出してもらわないといけません。その知恵を結集し、新しい発想と知識を披露してもらい、積み上げて行く作業場が本来のCOEのあり方ではないかと思うのです。4年間、公的資金と大学の援助金をもらっていますから。他班のことも知りづらいますが、1班としてのまとまった動きは決して活発ではないです。メンバーの皆がかなりのハードワークを強いられているということもありますが、お互いに勉強し、啓発しあうという実務的集まりは多くない。そうだと、勢い皆、自分の知っている知識や調べた史資料で『絵引』を作り上げていかざるを得ない。あるいは、せいぜい発表会を計画し、発表して皆に批判を乞うしかない、ということだけになりがちで。どうも達成感が少ない。それで終わってしまう。

いくつかの矛盾をかかえる中で、どのレベルまでやるかと考えはじめると、根本的な批判も出るんじゃないかな。

田島 非文字資料を誰にでも分かるように記号化し、言葉で書き換えていくというのは、ある意味で邪道かも知れない。それは、今まで絵画の専門家がお前ら素人には分からない、分かるわけがないと言っていた部分、すなわち非文字の部分文字化するという形で、ひとつはデータベース化するとか、ひとつは『絵引』を作るとか、あるいは音楽や映像を意味付けしていく作業は、今まではその道の専門家とか、あるいはマニアックな方たちが素人には解らないといって排除してきた部分を積極的に取り込んでしまうと、誰もが皆、使えるようにするという意図では、COEの課題はすごく有意義な課題ですよ。もうひとつは、今まで国際シンポジウムを開催して、招聘した外国の先生方からコメントをもらい、リップサービスかもしれないが、神奈川大学COEの試みのひとつである『絵引』作りっておもしろい、と評価してもらい、加えて外国にある図絵からも『絵引』を作り、比較することで日本と外国の習慣や服装などの擦り合わせができ、お互いの国の民族文化の相互理解に役立つ、だから外国物の『絵引』も作ったらといわれました。そうすること

で『絵引』は世界の、人類の共有財産になっていく、と。だとしたら、『絵引』作りはより一層、正確性を求められるけれども、ある程度、共通認識として人類が共有できる作品でもあり、大いに意味があると思っています。そういうことはメンバーがお互い、大体、同意事項として持っていると思いますよ。では、実際にどうするのか。結局、作業をやる個人に押し付けられるというか、その人の責任みたいになっている。

大学の先生方というのは皆、わがままな存在だから。プロジェクト研究の場合、相当カリスマ的な人がリーダーに立って、ある程度見通しをもって、皆を引っ張っていかないと、特に文系の場合の研究は難しいでしょう。神奈川大学COEを例に言えば、各班との交流、連携が希薄ですね。COEの全体会議や全体研究会で発表されるまで調査・研究過程が分からないのですよ、結果しか。それから同じ班のなかでもお互いが調べたことや知っている知識を披露し、議論し合うことが大事ではないか、と思います。おそらく澁澤先生の『絵引』作りの時には、月1回くらいはコンスタントに行っていたと思います。

もうひとつ、教員は大学の公務などでほとんど動けないので、もっと斬新、かつ柔軟な発想を持つ若手研究者に自由にCOE研究を推進してもらおう方が良かったのではないか、と思っています。

具体的な批判をすると、根本的な矛盾にいくのでしようが、現場ではどう微調整していくのか...

田島 実はこのCOEプログラムが始まる時に、1班の会議のなかで、『絵引』を作るとしたら自分では何ができるか、という話をしました。自分の案としては、神奈川大学日本常民文化研究所（以下、常民研と略）との関わりもあり、自分の研究とも関わりがある、全国的にかなり残っている漁業作業図や漁業「絵馬」、「絵図」を集めて、そこから図絵を切り取って、地域ごとの特徴を引き出した漁業編の『絵引』を作ろう、という計画書を出したことがあります。

だが、それは『産業図絵』であって『生活絵引』ではありません。そんなことはない、これだって生活そのものだといったのですが、結局、賛同を得られませんでした。『農業図絵』だと何でよいのか、という明確な答えはなかったように記憶しています。土屋又三郎の『農業図絵』を使うにあたって、はじめは常民研に『農業図絵』

の類本、『耕稼春秋』（八、九、十）があるのだから利用しない手はない、それに常民研所蔵本を使えば、使用に当たっての著作権の問題も生じないと。私も常民研の所員ですけれども、所蔵されている『耕稼春秋』をきちっと見たことがなかったのです。いわれてから見たら、絵に省略されている部分がずいぶん多く、『絵引』の対象史料としては不向きだ、と判りました。それで、『農業図絵』を底本として使うことになったのです。だけど、それでは著作権問題が生じ、クレームも来るだろうと。しかしこれまで、困ったね、というだけで、そこの調整は全然手が付けられて来なかったのです。結局、北海道班を担当していただいている菊池勇夫先生も私も、途中では著作権問題で板挟みになってしまっ...。現在も続いています...

COEのプロジェクトは最初、いろいろ自分にとって多くの未知なるものが学べるプロジェクトかな、新しい可能性を得ることができるかな、と大きな期待を持っていたのですが。途中でプロジェクトから抜けた人は賢かったと思いますよ。私自身、ほとんど自分の研究が挫折した状態で...。班の課題遂行に、こちらからは是非といって加わってもらった菊池先生はじめ他大学の先生方には大変申し訳ないことをした、と反省しています。大学外部から加わってもらった先生方のほうが熱心に、しかも義務感をもって研究を遂行していただいていますから。

ただ、COEみたいに各班に分散化してしまうと、逆に今度は他の班の相手が見えなくなる。その調査・研究の難しい過程までは知り得ない。COEプログラムが解散すると、研究者各人が時間と費用をかけて会得したノウハウは霧散してしまう危険性がありますね。

せめて、どんなところがまずかったのかということを含めてその記録は残すべきだとは思いますが...。田島 COEが始まって2年目で見直しをする、現状を踏まえて新たに統廃合する、と聞いていましたが、抜本的改革は不十分でした。それがこれまで同じように来てしまった原因ではないか、と思います。じゃあ、お前は色々文句いっているが、どれほどのことをやってきたのだ、と言われたらぐうの音もでませんが...。愚痴を言わせてもらいましたが、大局的にはCOEのお陰で新しい挑戦的な勉強・研究をさせて貰いました。リーダーはじめ、メンバーとスタッフの皆さんには感謝しています。

（2007年4月23日 於COE共同研究室 聞き手：香月洋一郎 記録：國弘暁子）